



Contents

- 02 イベントリポート
産業遺産でコンサート
- 03 連載
チラリドック見学会 ークレーン編ー
- 04 イベントリポート
ペリー来航 160 周年記念企画展
浦賀大変！ “かわら版” に見る黒船来航
- 06 連載 うらが今昔④
石川島造船所浦賀分工場
- 07 連載 ドックのお話④
昔、ドックで働いていた方へインタビュー
- 08 連載
うらうら散歩

浦賀ドックには

歴史的価値の高いレンガドックをはじめ、産業遺産が集積しています。

レンガドック

レンガ造のドックは日本に2基しか存在しません。もう1つの川間ドックは現在ゲート（扉船）が開放され海と一体になっているため、ドライドックとしての形を残すものは、浦賀ドックが日本で唯一となります。

産業遺産 で コンサート

4月27日(土)に浦賀ドックでレンガドック活用イベントが開催され、機関工場でのコンサートや造船技術の工作体験などが行われました。ここでは、浦賀中学校と三浦学苑高等学校の吹奏楽部によるコンサートを中心にレポートします。浦賀中学校放送委員の吉澤伸弥さんと大場未来さんの司会で始まったコンサートでは機関工場内に音と色が溢れ、イベントを彩りました。

イベントレポート



↑三浦学苑高等学校

浦賀中学校→

Q: アンコールの拍手が鳴り響いていましたね?

予定外だったので驚きました
うまくできたのでほっとしました

Q: 演奏で苦労したところは?

2曲目のエンターテイメントマーチが変拍子で難しかったです

Q: 『ふるさと』に歌を交えたのはどうして?

浦賀は私たちの『ふるさと』です
こういった機会はありませんし地元なので感謝の気持ちを込めて演奏しました

Q: あなたの部活を色に例えると?

温かいピンク色
音楽は人を幸せにしたり元気を与えたりすると思うからです

Q: 95名の大所帯をまとめる石井さん。普段の心掛けは?

部長として部員それぞれの個性に合わせた言葉を選んでいきます
私自身の行動でみんなの気持ちがよい方向へ進むよう心掛けています

Q: フルートはいつから演奏していますか?

中学1年から始めて6年目になります
卒業しても趣味として続けていきたいです

インタビュー



浦賀中学校3年

片倉 将亮さん(部長・指揮者)



浦賀中学校2年

田中 美来さん(バリトンサクソ)



三浦学苑高等学校3年

大友 和美さん(副部長・アルトサクソ)



三浦学苑高等学校3年

佐藤 菜さん(副部長・フルート)



三浦学苑高等学校3年

石井 聡美さん(部長・コントラバス)

ワンデーミュージアム

造船技術の工作体験 ~ 一輪挿しづくり ~



よく見ながら



完成!

リベット技術

刻印ポンチ技術

リベットと刻印ポンチを使って、一輪挿しを作りました。母の日のプレゼントにぴったりです!



かわいく出来たよ!

咸臨丸乗組員子孫と語らう場



咸臨丸子孫の会の皆さんにお集まりいただきました。

チラリ ドック見学会 クレーン編

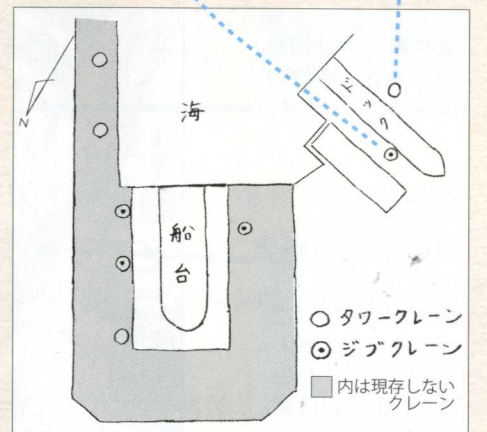
レンガドックでは「船を修理する」ため、重い物をつり上げて移動させる、さまざまなクレーンが活躍していました。現在、レンガドック横に2基のクレーンが保存され、イベントのときに見学することができます。

大きい方は「タワークレーン」(正式名称はハンマーヘッドクレーン)といい、昭和18(1943)年に造られ、高さは30m近くありました。10階建てのビルに相当します。高さ20m部分に運転席があり、運転手は一日中降りずに操縦していました。修理する船の部品交換をする役割を果たしていましたが、使われなくなってから

は老朽化が進んだこともあり、クレーン上部はタワー部分から外されています。

小さい方は「ジブクレーン」といい、昭和20(1945)年に造られ、高さは5mになります。船の中を修理するため、部品を台車に乗せて機関工場に運ぶ役割をしていました。

浦賀ドック操業時には、船台の周りに「船を造る」ためのクレーンがありました。一番大きいタワークレーンは船の組み立てなどに使われ、レンガドック横のタワークレーンの4倍の量をつり上げが可能でした。その他にも、船のブロック(パーツ)を造る門型クレーンやジブクレーンが、さらに東岸には船の内装工事(艀装)をするためのクレーンがありました。



浦賀大変! “かわら版” に見る黒船来航

イベントリポート

今年、ペリー来航から、ちょうど 160 周年にあたります。記念イベントとして、6月1日(土)～9日(日)に「浦賀大変～かわら版に見る黒船来航」が開催されました。今回は市民活動団体「浦賀歴史研

究所」が企画・運営をしました。各地に流布した「かわら版」や「絵巻」などから、当時の人々がペリー艦隊や異国人をどのように感じ取ったのかが分かる展示会でした。ここでは、その展示の一部を紹介します。



676 名の来場者がありました。

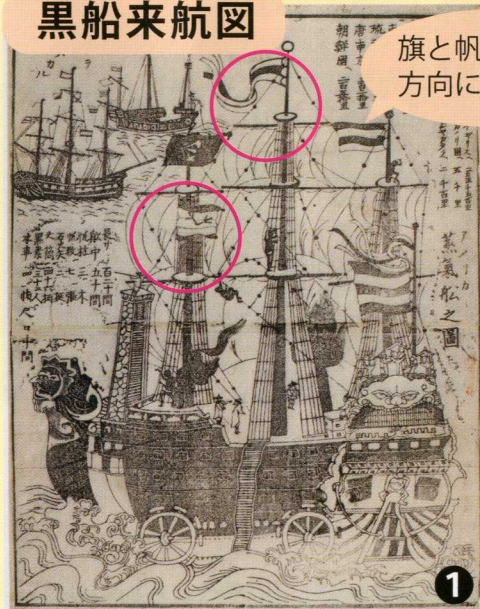


幕府の目を かいくぐって作られ、読まれた “かわら版”

当時、かわら版の出版は幕府から禁止されていました。黒船やペリーの情報はもちろん、江戸幕府の外交、時事問題についても情報を流すことは違法とされていました。

しかし、「伝えたい」「知りたい」という欲求は抑えられるものではありません。違法と承知の上で幕府の目をかいくぐり、かわら版が発行されました。「黒船」や「ペリーの肖像」をそのまま刷るものもあれば、時代設定を鎌倉時代の蒙古襲来に置き換えて摘発されにくいように工夫されたものもありました。

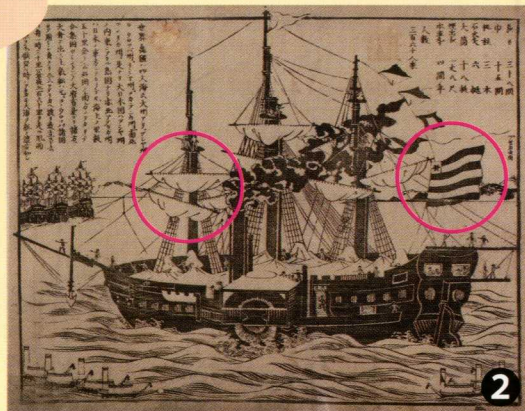
黒船来航図



(横浜市中央図書館蔵)

旗と帆のたなびく
方向に注目

半年後に描かれた図は……



(横浜市中央図書館蔵)

①は、船尾から風を受けて帆走する船の図です。
②は、帆をたたんだまま蒸気力で走る船の図です。どちらもイメージで描かれた図ですが、②の方がより実物に近い描かれています。

蒸気船図に劣らず、アメリカ人を描いたかわら版も数多く出まわりました。顔の輪郭、眉や髪の毛など細い線からは当時の彫刻技術の高さがうかがえます。

これがペリーだ!

眉や髪の毛は細かい巻毛で、特徴的に描かれています。

口の周りがひげで囲まれています。武士はひげを生やさなかったため、軍人のペリーがひげを生やしていたことは驚きだったようです。



(個人蔵)

ボタンを使った上着。当時、ボタンは大変珍しいものでした。

正反対の狂歌

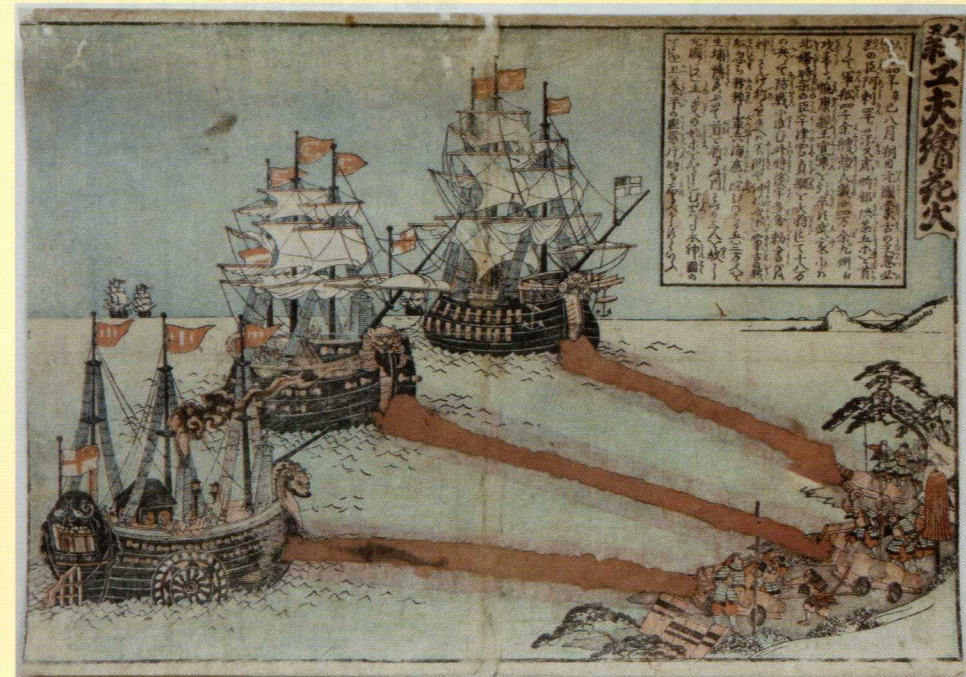
陣羽織ちよいと異国の洗い張り
浦賀じようぶでさてもきれない
(裏が)

陣羽織そつと異国へ洗い張り
ほどいて見れば浦が大変
(裏が)

“浦賀”を詠み込んだ狂歌には、このようなものもありました。庶民の複雑な気持ちを表すかのようなのです。

※狂歌は、こつけいを主にした、(くだけた表現の)短歌。
『岩波国語辞典』第七版

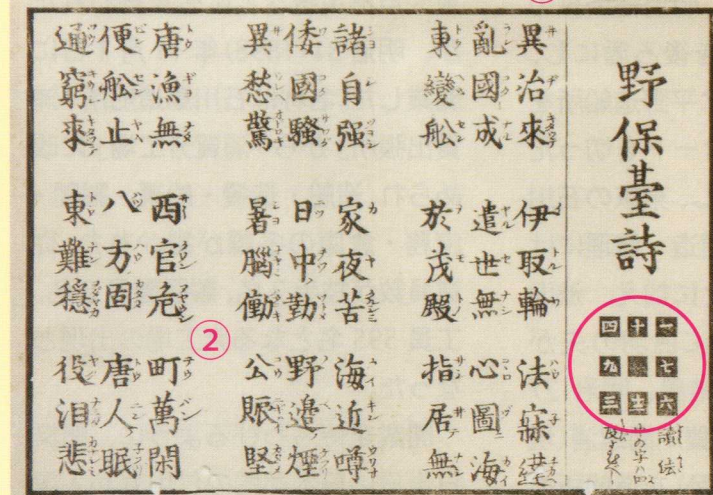
絵花火～蒙古襲来～



これは「絵花火」という仕かけのかわら版です。陸に描かれた大砲から赤い筋が異国船へ伸びています。実は、赤い筋の箇所には、もとは火薬が塗ってありました。火を付けると、パチパチと火花が異国船へ向かって燃えていきました。

暗号のようなかわら版もありました。
↙ ↘ ← ↓ の順に読んでください。

何が書いてあるのかな?



(個人蔵)

よみかた
読法 中の字ハ四度よむべし

① 異国船 東国来 治国変 乱国成
② 町人悲 役人閑 万人泪 唐人眠

イコクセン トウコクキタツテ チコクヘン ランコクトナル
テウニカナシミ ヤクニン(ヒマ) バンシナミダ トウニンノネブリ

かわら版って何?

1枚または数枚つづりの木版印刷物で、災害情報や珍しい出来事を記事にして販売されていたものです。江戸時代半ばから都市部のメディアとして定着しましたが、版行許可を受けていない違法出版物であったため版元・著者・絵師などの情報が記されていません。

かわら版は当時のニュースのあり方や、当時の人がどんな情報を得ていたのかが具体的に分かる史料です。庶民が気軽に手に取れる価格で、ひらがなが多用された読みやすいメディアでした。

石川島造船所浦賀分工場

郷土史家 山本詔一

明治29(1896)年9月に浦賀船渠株式会社^{せんきよ}の創立総会が行われ、浦賀ドックが誕生したが、その準備をしていた頃、石川島造船所も浦賀への造船所建設を検討していた。

浦賀ドックにとっての脅威の出現

石川島造船所は、明治経済界の大御所・渋沢栄一を後ろ盾にし、明治22(1889)年に平野造船所を改編して新たなスタートを切った会社であった。しかし、東京の石川島の地が大型船の建造・修理には不向きであったことに加え、渋沢の提案により浦賀に白羽の矢が立った。現地調査の結果、明治27(1894)年6月、西浦賀川間館浦(現在の西浦賀5・6丁目)を造船所の候補地とした。

この話を聞いた浦賀ドック陣営は、明治28(1895)年1月、石川島造船所の専務・梅浦精一と会見した。浦賀ドック側の出席者は、後に初代社長となる塚原周造と中央氣象台長を辞めて浦賀ドックの設立に向けて準備をしていた荒井郁之助であった。「浦賀のような狭い土地に二つの造船所があれば互いに無益な競争をする恐れがある」と

憂慮し合併案を提示したが、話し合いは物別れに終わった。後に取締役となる渡辺治右衛門も再三再四にわたって交渉に臨んだが、いずれも不調に終わった。石川島造船所の梅浦は「君が選定した内港を捨て、石川島造船所が予定した外港に築渠するなら応諾しよう」と主張したといわれている。

ライバル造船所の開業

資金力のある石川島造船所は着々と準備を進め、明治28(1895)年7月に船渠工事の認可を受け、同年10月には鍬入れ式をおこなっている。この工事の監督は、呉の海軍工廠第1ドックや横浜のドックを造った恒川柳作に依頼された。

その後、船渠の度重なる設計変更や自然災害などにも見舞われたが、明治31(1898)年11月1日に開業した。名称は石川島造船所「浦賀出張所」から「浦賀分工場」に改められ、造船・造機・船渠・製図・庶務・倉庫の各課が置かれた。従業員数が技手2名、製図職員5名、工員595名となる大工場の出現となった。

開業を待ちわびるように、開業日当日に日本郵船の仁川丸が入渠した。同年中に、そのほか4隻の入渠が相次いだ。

華やかな船出

開業式そのものは半年以上経過した翌年の明治32(1899)年6月11日におこなわれている。開業時にドックは竣工していたものの、その他の整備が残されていた。電灯設備、造船台、クレーンの設置、各工場の機械設備のすべての完了

を待っての開業式となった。

開業式の様子を「東京日日新聞」は「招待客は横浜税関波止場から神戸丸で浦賀へ向かった。浦賀の式典は神主の祝詞、渋沢栄一會長の式辞、海軍次官、逓信省管船局長、東京府知事、神奈川県知事らの祝辞があり、その後、立食パーティとなった。パーティ会場では手品や大神楽に続いて浦賀の『虎踊り』も出て、余興に花を添えた」と伝えている。招待客の数は1000人以上であったとされる。またドックの大きさについても「長さ451尺(136⁶/₁₆余)、幅54尺(16⁶/₁₆余)、深さ32尺(9⁶/₁₆余)、で排水時間1時間半、夜間工事のために電気灯の設備あり」「目下郵船会社豪州定期船の二見丸が入渠中、船台は三台据え付けられ、大阪築港よりの注文の曳船2隻の汽船建造中」と報じている。

こうして順調にスタートした影には、石川島造船所の会長となっていた渋沢栄一の力が相当にあったことは、入渠中の船や建造中の船の所属からも分かる。一方、35歳の造船家・福地文一郎を分工場長に抜擢し、28歳の小川鉄五郎を造船課長に、26歳の栗田金太郎を造機課長にするなど若手を起用していることから、この工場への期待の大きさがうかがえる。



川間工場のドック跡(※現在は水が入っています)

ドックのお話④

昔、ドックで働いていた方へインタビュー

浦賀工場では、かつて現図場というところで、船の原寸大の設計を手作業でおこなっていました。42年間の工場勤務のうち、実に38年間にわたり現図場を担当していた伊藤義光さんにお話を伺いました。

——当時、地元ではどのくらいの方が浦賀ドックに入社したのですか

昭和19(1944)年3月に浦賀尋常小学校を卒業しました。卒業生120人のうち80人が一緒に入社しました。年齢は14歳という若さで、同期入社は206人いました。戦争が終わると武器や軍艦などを造る必要もなくなりました。故郷の家業を継いだり、もともとやりたかった仕事に就いたりするため、それぞれ退社していき同期の社員は40人になりました。

——どんな仕事をしていましたか

入社してすぐに現図の職場に配属されました。原寸大で船の全部の図を描いて現場に指示する仕事です。とても大きな図なので、幅18⁶/₁₆、長さ113⁶/₁₆の床一面を使って100人ぐらいで取り掛かり「寸法図」「型紙」「木型」などに造り分けます。この後は「マーキン屋」が鉄板上に図を写し、「切断屋」の作業によって船の部品が出来上がります。また、現図場の工程で船の部品の模型を造るのですが、小さい頃から、大工だった父の見習いをしていたおかげで、その技術が生かせ、会社からとても重宝してもらえました。

——ずっと手作業で設計していたのですか

昭和35(1960)年ごろから、現図場にコンピューターが導入されました。縮小した図面を描いた後、機械で原寸大に拡大するようになったのです。それまでの作業がまったく変わることになるので、導入前には係の部下たちが戦々恐々としていました。私も内心不安でした。でも強がらず、こうした気持ちをみんなに伝えて共有することで、何とか技術の変革を乗り越えることができました。

——浦賀ドックのお気に入りのロケーションは

東叶神社の上にある明神山からの眺めですね。当時のことを思い出しながら見えています。ドックが一望できて素晴らしい眺めです。



伊藤 義光さん



現図場の建物の前で



当時の現図場の様子

©住友重機械工業株式会社

うらうら 散歩

その2

「浦賀の渡船」は浦賀の東西を結ぶ「市道2073号」です。生活路として約300年の長い歴史を持ちますが、最近では観光ルートとしての利用が多くなりました。渡船を運航しているミウラ総建の社長・三浦一幸さんに、運航のきっかけやエピソードを船上でお聞きしました。



船上の三浦さん



愛宕丸

渡船の由来

渡船は浦賀奉行所が置かれて間もない、享保10(1725)年ごろから始まりました。昭和18(1943)年からは横須賀市が運航するようになり、昭和24(1949)年からは民間委託されるようになりました。昭和36(1961)年までは「伝馬船」という櫓漕ぎでした。今は「愛宕丸」という機械船で、「ポンポン船」の愛称でも親しまれています。

船長応募のきっかけ

「子どもの頃、東叶神社の近くで仕事をしていた父を迎えに、母と伝馬船に乗ったものでした」と、三浦さんは懐かしげに話を切り出します。かつては、鴨居地域の方が浦賀の金融機関に来るため、よく渡船を利用したそうです。また、浦賀ドック内でも浦賀工場と川間工場の行き来に利用する方も多かったとのこと。

このように地域の中に溶け込んでいた渡船でしたが、先代の船長が体調不良で3年で辞めることになりました。一人で毎日渡船を続けることは本当に難しいことです。「このままでは浦賀の渡船がなくなってしまう」と危機感を抱いた三浦さんは、「会社組織として複数の船長が交代でおこなえば、安定して渡船が続けられる」と業務委託募集に名乗りを上げました。

二代目愛宕丸がメディアに登場

渡船開始120周年にあたる平成10(1998)年には、現在の二代目愛宕丸が就航しました。メディアに取り上げてもらったことでお客さんが増え、年末年始も臨時運行するようになりました。元旦には利用者が普段の3倍に上り、三浦さんも自ら舵を握ります。

毎年9月におこなわれる浦賀の祭

礼では、夜店で遊ぶお客さんのために21時まで、12月13日の西の市でも延長運航しています。「渡船は浦賀の財産なので、まちに役立つことがあればお手伝いしたい」と浦賀への深い思いをにじませます。

「最近うれしかったことは？」とお聞きすると、「花婿、花嫁を乗せたことですね」と本当にうれしそうな笑顔で語る三浦さん。西叶神社で挙式する二人を東岸から乗せたことがあるそうです。西岸に着くと親族が待ち受けていて、大きな拍手で迎えられました。赤い愛宕丸に白無垢姿が一層映えたそうです。

浦賀の渡船

営業時間：7時～18時(12時～13時除く)。
12月31日～1月3日は9時～15時
TEL：046-841-1509 (株ミウラ総建)

イベント
情報

第38回レンガドック活用イベント

見学会とシンポジウム

入場自由

①産業遺産見学会

2013年10月12日(土)

時間：11:00～12:00、場所：レンガドック周辺

②「横須賀の近代歴史遺産～日本の誇り体感シンポジウム～」

時間：13:00～16:00(11:30開場)、場所：浦賀工場内機関工場

I 基調講演

横浜歴史資産調査会常務理事・米山淳一さん

II パネルディスカッション

米山淳一さん、栗原俊雄さん(毎日新聞学芸部記者)、阿部洋治さん(ドックと浦賀を愛する会)、山本詔一さん(コーディネーター・郷土史家)

ご意見、
ご感想も
お待ちし
ています!

イベント

公募展「浦賀ドックと浦賀のまち」

入場自由

時間：10月1日(火)～11日(金) 8:30～21:00

場所：浦賀コミュニティセンター

内容：“写真川柳”と“ストーリー組写真”の公募作品を展示しています。

お問い合わせ

発行 レンガドック活用イベント実行委員会
編集 レンガドックかわら版編集部

レンガドック活用イベント実行委員会事務局
(横須賀市 都市部 市街地整備景観課内)
〒238-8550 横須賀市小川町11
電話 046-822-8526 ファクス 046-826-0420
E-mail keikan-ci@city.yokosuka.kanagawa.jp